

学生インターンシップ受け入れを起点とした 農業経営者間の連携・相互学習機会の創出

研究組織：地域連携事業代表者 宇都宮大学農学部農業経済学科 学科長 斎藤 潔
教授 大栗 行昭
事業推進協力者 栃木県農業士会 会長 大山 寛
栃木県農業者懇談会 常務理事 羽石 克彦

1. 事業の目的・意義

農業を取り巻く国内外の環境が一層厳しくなる中、これからの農業経営者は自らの経営を改善するだけでなく、地域内の他経営との協力・連携関係を構築することが重要になってきた。しかし、日常的な交際の中で他経営の内部に関わる情報を得るのは容易ではない。そこで、経営者間での情報共有や新たな協力・連携関係の構築に向けて、インターンシップ受け入れを起点とした相互学習機会を創出することを企画した。

農業経済学科は授業の一環として「農業インターンシップ」を開講している。この授業は栃木県農業士会（事務局＝栃木県農業者懇談会）の協力を仰ぎ、学生が県内の先進的な農業経営者の生産現場に10日間通い、農作業を体験し経営のあり方を学ぶものである。インターンシップを完了した学生は受け入れ農家の農作業や経営戦略の特徴や改善点などを報告書に作成して発表する。

その発表の場に、学生を受け入れた農業士、次年度に受け入れる予定の農業士および県農業士会役員、県の農政担当者などを招き、情報交換会を実施、農業経営者の連携・相互学習の機会を創出する場とする。

この事業は農業インターンシップと情報交換会を実施する。これにより、農業の現場で豊富な経験に裏付けられた農業観・経営観に触れる機会を持った学生は、学習意欲が向上すると同時に、人間的にも大きく成長することが期待される。一方、経営者は自らの経営を見直すとともに、ふだんは把握することが難しい他経営の情報が得られる。さらに経営者・農政関係者・学生・教員という異なる立場の関係者による意見交換は、イノベーション

ンを誘発し、地域農業の発展につながる可能性も期待される。

2. 研究方法

(1) 農業インターンシップの実施

農業経済学科は平成19年度から農業インターンシップを開講している。授業で学生は栃木県農業士のもとに10日間通い、農業技術や経営のあり方を学ぶ。

これまで計61名の学生がこの授業を受講してきた（19年度7名、20年度11名、21年度9名、22年度10名、23年度8名、24年度8名、本年度8名）。

農業インターンシップは次のような進め方をとる。農業経済学科が受講学生を募集し、学生の希望する経営類型などを取りまとめる。その希望に沿って、栃木県農業士会が受け入れ農家を選定する。学生と農家の組み合わせが決定すると、年度末の情報交換会（後述）で両者が対面し、簡単な打ち合わせを行う。後日、学科教員1名と学生が農家を訪問し、10日間の具体的な計画を準備する。年度に入ると、学生と農家が協議しながら実習を進める（図1）。



図1 下野市の受け入れ農業士と実習生

学生は毎回、実習日誌を記録して農家の確認を受け、全日程終了後、10日分の実習日誌を含む報告書を提出する。全員分を「最終報告書」として取りまとめ、情報交換会で配布するほか、口頭発表を行い、質疑に応答する。

(2) 情報交換会の開催

農業インターンシップの関係者が一堂に会して、顔を合わせて交流・意見交換し情報や経験の共有化を図ることは、参加者にとって大きなメリットがある。

何よりも、学生にとっては実習経験を振り返り、それを報告書に作成し発表する体験を通じて高い学習効果が得られると同時に、大きな自信を得ることができる。

農業経営者にとっては、学生の報告会に参加することを通じて、自らの経営を見直すとともに、ふだんは把握困難な他経営の情報を得ることができる。特に、学生の派遣先は、地域や経営品目が多岐に渡ることから、情報共有のきっかけとして適している（表1を参照）。

学生と農業経営者だけでなく、大学教員、農業団体・農政関係者や、次年度実習予定学生といった異なる立場の関係者が参加する場で意見交換することは、新たな学習機会を創出することにもなる。このような情報共有と相互学習が相乗効果を発揮すれば、イノベーションが誘発され、今後の地域農業の発展へとつながる可能性も決して小さくない。

本事業ではこのような好循環の起点となることを目的として、農業インターンシップの情報交換会を開催する。

表1 今年度のインターンシップ受け入れ農家

地 域	経営品目
那珂川町	そば・なす・水稻
真岡市	いちご・水稻
宇都宮市	肉用牛・水稻
下野市	かんぴょう・露地野菜
宇都宮市	水稻・麦・大豆
真岡市	養豚
鹿沼市	梨・りんご
宇都宮市	いちご・水稻

3. 事業の進展状況

平成25年2月の前年度報告会で、8名の実習予定学生と受け入れ農業士が対面した。25年度に入って農業インターンシップが始まり、これと連動して年度末の情報交換会を準備した（表2）。

表2 今年度事業のスケジュール

4～2月	農業インターンシップ実施
8月下旬	インターンシップ事務打ち合わせ ・平成25年度実施状況確認 ・平成26年度希望学生受入調整
2月上旬	報告書の提出、報告集の作成
2月19日	農業インターンシップ情報交換会 ・平成25年度・報告会 ・平成26年度・対面式

2月19日に25年度の報告会と26年度の対面式を兼ねて、農業インターンシップ情報交換会を本学で開催した。交換会の内容は表3のとおりである。当日の参加者は、受け入れ農業士10名、関係機関（栃木県農業士会、栃木県農業者懇談会、栃木県農政部）4名、25年度実習生8名、26年度実習予定者9名および教員10名、計41名であった。

まず、25年度実習生が受け入れ農業士の農作業や経営戦略の特徴などを整理し発表した。当日は報告書とは別に、パワーポイントの資料を作成し、1人10分程度の発表を行った（図2～図5）。各実習生の報告後に、受け入れ農家がコメントし、その後、他の参加者も含めた質疑応答を行った。

表3 平成25年度情報交換会のスケジュール

宇都宮大学と栃木県農業士会の情報交換会	
日時：	平成26年2月19日(水)
場所：	UUプラザ2階・コミュニティープラザ
I	農業インターンシップ情報交換会 (15:00～17:00)
1.	開 会
2.	あいさつ
3.	情報交換会
(1)	平成25年度について ・実習生8名の発表 ・受入農家からのコメント
(2)	平成26年度について ・実習予定者と受け入れ農家の対面式
(3)	総合討論 ・農業インターンシップ全体に関して

4. あいさつ・コメント
 5. 閉 会
 II 懇親会 (17:30~)
 場所：大学会館2階・談話室

3. 「農業の魅力」とは

- ①職場が自然のなかにあり、そこで
- ②自分の体を動かすことができるよこび。
- ③また、持続可能な農業という環境のもとで、
- ④いきものとの調和をはかる。
- ⑤⇒そんな持続可能な農業だからこそ、
人と業の歩調が揃っている。
- ⑥そして、そこでつながる人と人。
⇒農業の魅力とは、自然環境や人といった、自分
と世界をつなかりたと感じた。

図2 実習生のパワーポイント資料から

4. インターンを振り返って

- ・自分の体で体験したこと、感じたことはずっと心からはなれない。
- ・感動したことや楽しかったこともいっぱいあったが、しんどいなと思うこともあった。
- ・収穫の農繁期には、農家さんが朝早くから夕方遅くまで働いている姿を見ており、本当に尊いと感じる。
- ・大変なこともあるけれど、自然とのつながり、人とのつながりのなかで生きていることは、何にもかえることのできない農業の魅力であると感じた。

図3 実習生のパワーポイント資料から



図4 実習生の発表

養豚経営について①

分娩回転率との関わり

- 豚の妊娠期間は114~115日間
- 発情期間は3週間
- この期間は固定!
- このサイクルを崩さない

経営のポイント

個体管理を正確に行う

- 母豚の繁殖記録、発情観察、適期種付、受胎観察

図5 実習生のパワーポイント資料から

実習生の発表とコメント、質疑応答の後、平成26年度の実習予定学生と受け入れ農家の対面式を行った。

25年度実習生の報告を聴いた直後ということもあって、初めての顔合わせであるにもかかわらず、スムーズかつ和やかな交流・意見交換が実施できた(図6)。



図6 実習予定学生と受け入れ農家の対面

最後に、農業インターンシップの今後の進め方や、その他の方面への活用方法などに関する意見交換を行い、閉会した。その後、場所を変更し、懇親会も行った。

4. 事業の成果

農業インターンシップは7年前から行われ、学生の報告書は、現場での経験を通じて彼らが大いに刺激を受け、農業への関心・意欲を強め、また人間的も大きく成長したことを示していた。学生の態度は、受入農家からおおむね好意的な、高い

評価を得てきた。

一方、情報交換会は始まって4年目である。農家・関連機関・学生・教員が一堂に会して学習・交流するという取り組みは、関係者の農業インターンシップに関わる意識や、関係者同士の相互関係に少しずつ変化を生じさせている。

学生は実習体験を発表し、受入農家はこれにコメントする。これにより、両者が実習体験を振り返って見直す、貴重な体験ができる。また、ほかの経営に関する発表も聴くことを通じて、自らの経験や経営を相対化する契機となっている。

発表の場に後輩や教員が同席することは、いい緊張感を生み出している。学生は実習後に発表会があるのを意識することで、毎回の実習に臨む意識が高まる。また、発表でいい反応が得られることにより自信がつく。

次年度実習予定学生にとっては、報告を聴き、実習が始まる前に先輩に質問をすることで、実習前の疑問や不安を解消できる。また、実習に臨む前の素朴な疑問・意見は、農業経営者にとっても新鮮な視点を提供することになる。

教員にとっても、ふだん大学で目にするのではない学生の新たな一面を見いだすことにつながるとともに、地元でがんばっている農業経営者の経営戦略や考え方を深く知るきっかけになる。

農業経営者にとっては、学生や教員の発言を聴くことが教員らの教育・研究内容などを知る契機になっている。「大学ももっと農業士会を活用してほしい」「今後、もっといろいろな意見交換の機会を作ってほしい」「何となく遠い、敷居の高い存在だったが、身近な存在となった」などのコメントも得られている。情報交換会が大学と農業者との距離を縮めるきっかけになりつつあることは喜ばしい。

2014年2月25日『日本農業新聞』（北関東）がこの情報交換会の模様を報じた。報告書の最後に、記事を引用する。

インターン生ら体験の成果発表

栃木県農業士会と宇都宮大の交流会

【とちぎ】栃木県農業士会と宇都宮大学農学部が連携する「農業経営インターンシップ」の交流会がこのほど、宇都宮市の同大学で行われた。

インターンシップは、2007年度から始まった。座学が中心になりがちな大学のカリキュラムに、現場での体験実習を組み入れた。県内で先進的な農業経営に取り組む農業士から農業技術や経営を身をもって学んでもらう。

毎年10人前後の学生が参加している。13年度はソバ、水稲、かんぴょう、養豚、梨、リンゴなどの農家に8人が入り、年間で約10日間の現場実習を行った。

交流会では参加した農業経済学科の学生たちがそれぞれの体験を報告。「現場で実際に体験して初めて分かったことがたくさんあった」「重労働を重ねて収穫した時には大きな達成感があり、やりがいを感じた」「多くの人たちと素晴らしい出会いができた」など、その成果を披露した。